

土着知識と環境・開発問題

「アフリカの儀礼と環境会議」より

宮内 洋平

1 ■ 土着知識への関心

ヨーロッパ中心主義的な科学は人類に利便性をもたらすと同時に、それ自身では解決できない複雑な諸問題を生み出してきた。従来、西洋文明の影響が比較的少ないとされた「未開社会」を研究してきた人類学者は、非西洋の知識（土着知識）の重要性を西洋文明に対するアンチテーゼとして紹介してきた。しかしながら、近代化やグローバル化が進展し「未開社会」など見当たらなくなった現代世界において、人類学者は自らの研究の意味と位置づけを見出そうと模索している。こうしたなかで土着知識を科学的知識と対等な、まぎれもない同時代の知識のひとつとして捉え、学際的な研究協力のもとでその知識の収集と活用をめざす動きが出てきている。南アフリカでは本稿で詳述する「アフリカの儀礼と環境会議」が2003年9月にローズ大学で開かれたほか、2004年2月にも土着知識を議題とした会議が開催されるなど同知識への関心が高まっている。

「土着の」(Indigenous)という用語は1979年にサ

セックス大学の開発研究所で使用され始めたという(Sillitoe [1998: 244])。80年に出版された『土着知識システムと開発』(Brokensha et al. eds. [1980])への寄稿者の多くは人類学者と地理学者であり、60年代、70年代によく見られたトップダウン方式の開発に幻滅していた学者たちの手によるものであった。なかでも人類学者は後に応用人類学・開発人類学と呼ばれる分野へと参入していった(Sillitoe [1998: 244])。95年に出版された『開発の文化的特質』(Warren et al. eds. [1995])には、多くの開発援助団体所属の専門家や農学者も寄稿しており、この分野の学際化が進んでいる。2000年に開催されたイギリスの社会人類学会では「開発への参加」というテーマを掲げ、とりわけ土着知識に重点がおかれた(Sillitoe [2002: 7-8])。土着知識とは簡単にいえば、ある土地に起源を持ち、その土地の人々によって口承や模倣を通じて育まれてきた知識である。科学に比べると、より広い階級に共有されており、人々の日々の反復作業のなかで常に変化している知識であると定義できる(Ellen & Harris [2000: 4-5])。本稿の目的は、南アフリカの土着知識研究の動向を、「アフリカの儀礼と環境

会議」を中心にとりあげ、探ることである。

2 ■ 知識・自然・資源権利プロジェクト

南アフリカの研究助成機関、国立研究基金 (National Research Foundation=NRF)では現在九つの重要分野を定めている。そのうちのひとつが土着知識システム (Indigenous Knowledge Systems = IKS) 研究部門であり、同分野への関心の高さがうかがえる。IKS 研究部門では、ローズ大学人類学部のP・バーナード講師をコーディネーターとして「知識・自然・資源権利プロジェクト」が展開されている。同プロジェクトでは土着知識を「ある環境や景観に埋め込まれた独特の歴史的・社会的要素を反映したもの」と捉えている。当初は預言者の知識形成に重要な役割を果たしていると言われてきた水と関連する場所に焦点を絞っていた。だが、現在は洞窟・山・森のような聖域にまで対象は広がっており、そこではとりわけ、伝統医の知識や土着民の知識への関心、さらに開発による聖域の破壊が彼らの知識基盤にどう衝撃を与えているのかという問題に関心を寄せている。現在、東ケープ州、クワズールー・ナタール州、フリーステート州、リンポポ州で、さまざまな分野の研究者がフィールド調査を実施しているところである (Bernard [2002: 5])。

NRFはこのプロジェクトに関連する研究過程と成果の発表の場を提供するために、「アフリカの儀礼と環境会議」を企画した。同会議は、「社会・文化的コンテクストで儀礼行為を通して表現され、活性化させられる自然・人間・精霊の相互作用の解釈学的・現象学的経験の重要性を喚起するために、環境に焦点を当てること」、そして「社会的・経済的・宗教的変化がいかに現在の自然環境と儀礼を通じた自然の認識方法に衝撃を与えてきたか

という点に関心を向けること」を目的として掲げた。

3 ■ アフリカの儀礼と環境会議

3日間に及んだ「アフリカの儀礼と環境会議」は、呪術草を焚き上げ、会議の成功のために祈りをささげる伝統医の儀礼で幕を開けた。同会議には基調講演者としてJ・K・オルポナ教授 (カリフォルニア大学デイビス校)、B・テイラー教授 (フロリダ大学)、R・ウィリス教授 (エディンバラ大学)の3名が招待されていた。

オルポナ教授はカリフォルニア大学で宗教研究プログラムのディレクターを務めているほか、現在アフリカ宗教研究学会の会長でもある。ボストン大学で学び、1983年から90年までナイジェリアの大学で教鞭をとった。2002年にエディンバラ大学より名誉博士号を授与されている。95年に「土着宗教の伝統と現代性に関する国際会議」を企画・開催するなど精力的に活動している。Olupona [1991]; [2004]など多数のアフリカの宗教に関する編著書があり、今回の講演ではナイジェリアのヨルバの宗教観と環境の問題を現代的視点から論じていた。

テイラー教授はウィスコンシン大学オシュコシュ校で13年間教鞭をとり、2002年よりフロリダ大学宗教学部で倫理学を教えている。Taylor et al. eds. [2004]の主編者を務めるなど「宗教と環境」の問題に造詣が深い。また急進的な環境保護活動などに対して環境倫理学の立場から批判的関心をもって研究に取り組んでいる (Taylor [執筆中 a]; [執筆中 b]; Taylor ed. [1995])。今回の講演でも、その成果を近年の環境保護団体による啓発用ポスターなどの表象や言説を中心に論じていた。

ウィリス教授はオックスフォード大学でエヴァ

ンス＝プリチャードの指導の下、人類学を学んだ。1966年にタンザニアでのフィールド調査の成果で博士号を取得し、67年から現在に至るまでエディンバラ大学で教鞭をとっている。タンザニアとザンビアでの調査をもとにシンボリズム、口承、民俗医療、神話、ヒーリングに関する研究をしてきた。近年の著作に、Willis[1999], Willis & Curry eds. [2004] がある。前者はザンビアでの伝統医による治療と儀礼を取り扱った研究であるが、今回の講演ではフィールド調査時に撮影した映像を用いて、その内容を発表した。

基調講演に象徴されるように会議全体を通じて、土着知識と環境・開発問題との関連に対するさまざまな角度からのアプローチが試みられた。同会議での発表者は人類学者、社会学者、歴史学者、心理学者、環境学者、言語学者、音楽学者、美術研究者等と学際の様相を呈していた。また伝統医協会所属の伝統医など、現場の実践者にも発表の機会が与えられていた。伝統医自身による儀礼や踊りといったパフォーマンスが発表中に盛り込まれるなど、通常の会議ではあまり見られないであろう快活な雰囲気にも包まれた。全部で25の口頭発表は、内容的に見ると「土着知識それ自体の研究」、「土着知識と自然環境との関係を論じた研究」、「土着知識の維持・活用に関する応用的研究」という三つのタイプに分けられる。以下、それぞれについて主要な報告の内容を簡単に紹介しよう。

「土着知識それ自体の研究」の多くは、南アフリカの諸民族の儀礼を取り上げていた。とりわけ伝統医・呪術者に着目したものが多く、たとえば「アフリカの儀礼の仲介者としての女性」（ベンダ大学心理学部、J・ムファマデ）では、これまで見逃されがちであった儀礼のなかでの女性の役割に着目した興味深いものであった。「コーサの精神性のエッセンス」（ローズ大学アフリカ言語学部、P・ム

トゥゼ）は、Mtuzze [2003]の出版記念を兼ねたもので、南アフリカのコーサ人の伝統宗教・文化とアイルランドのケルトの伝統宗教・文化の類似性を実証し、両者へのキリスト教の影響と現状に言及していた。同発表は伝統的な土着知識のひとつである土着の精神文化が、近代の影響とともに形成されたことを明らかにした。

つぎに「土着知識と自然環境との関係を論じた研究」では、「アフリカの儀礼と環境——リンポポ州の聖なる湖フンドゥジ湖の事例——」（スポーツ・芸術・文化省、T・V・ネトウシアバ）、「コーサ人の川の儀礼における社会・精神・自然界のダイナミクスと相互関係」（ローズ大学人類学部、P・バーナードほか）、「フリーステート州の聖なる洞窟モトウレングにおける伝統医に着目して」（ポーアトレッカー・ンコメ博物館、D・ンゴベセ）、「カヤの森林儀礼と環境」（米セントローレンス大学人類学部、C・ニャムウェル）といった題目から明らかのように、湖・川・洞窟・森林といった自然環境が重要な聖域であることを具体的に示した。アフリカの儀礼の舞台は自然の中にある。それを裏づける数々の研究成果は興味深いものであった。

最後に「土着知識の維持・活用に関する応用的研究」では、「ロックアートサイトへのアクセス——権利か資格か——」（ローズ大学人類学部、N・ンドロブ）が、先住民サン人の描いた洞窟壁画の保存問題に着目していた。入場料を支払った観光客がサン人の聖域である洞窟への立ち入りを認められる一方、サン人自身は祖先の聖域に自由に立ち入れないという実情をあげ、「確かに洞窟壁画の保存には観光客のもたらすお金は重要だが、聖域の神聖性の保護という観点こそより重要ではないか」という指摘がなされていた。

アフリカの伝統医による治療行為に欠かせないもののひとつが薬草である。発表では伝統医自ら

が実際に薬草を見せ、使用方法を説明する場面もみられた。「伝統医——ヒーリングにおける薬草と動物性物質の持続的利用を促進する彼らの役割——」(ウィットワータースラント大学, S・ンディンギ)では、表題からも明らかなように資源の持続的活用に着目していた。また「文化的に重要な虫の持続的採集に関する儀礼と信仰の生態学的かわり」(トランスバール博物館, R・B・トムズほか)では、リンポポ州の食虫文化をとりあげていた。発表者は虫の採集地と販売地の分布を綿密なデータで示し、ある採集者は販売地から200キロも離れた土地で虫を採集していることを明らかにした。「消費者は貧困のせいでこの虫を食べざるを得ないのではなく、この虫が美味しいから食用にしている」という点に留意すべきだという。

■おわりに

学術研究者と現場の実践者が一堂に会したこの「アフリカの儀礼と環境会議」では、学術研究者の間違いを現場の実践者がその場で正す場面も数多く見られた。刺激に富んだ会議の雰囲気は南アフリカの土着知識研究の層の厚さを感じさせた。

19世紀の社会科学や植民地主義が「非西洋的知識は科学的でなく、劣ったものだ」という信仰を広めた罪は大きい。今日、途上国・先進国の研究者に共通して、土着知識は1000年単位の歴史をもって受け継がれてきた重要な資源であるとの認識が高まっている。この流れを受けて、各国の研究機関の協力によって土着知識のグローバルネットワーク機関が主として欧米諸国に設立されてきている。そこでは土着知識に関する研究活動のほか、データベース構築やその分析活動も行っており、土着知識の実態、土着知識を反映した技術、土着知識を活用した開発手法などが研究対象となって

いる (Warren et al. eds. [1995: xvii])。

「アフリカの儀礼と環境会議」に関連する研究およびプロジェクトは、上述の世界的流れと相まって、南アフリカを中心にアフリカ地域全体を視野に入れた土着知識の基礎的・応用的研究を進めていく大きな勢力となっていくであろう。「土着知識研究の現状と今後の方向性を考えるうえで大きな意義があった」という点を全会一致で総括し、同会議は閉幕した。「伝統と現代」、「グローバルとローカル」など興味深いテーマを導き出すだけでなく、学際的研究の促進や、学術研究者と現場の実践者の交流など、現代の学術研究をめぐる重要な視点もちりばめられた土着知識研究から今後ますます目が離せない。

【参考文献】

- Bernard, Penny [2002] “Knowledge, Nature and Resource Rights Project,” *People Science Voice Newsletter*, 1(2), p.5.
- Brokensha, D. et al. eds. [1980] *Indigenous Knowledge Systems and Development*, Lanham: University Press of America.
- Ellen, Roy & Holly Harris [2000] “Introduction,” in Roy Ellen et al. eds., *Indigenous Environmental Knowledge and Its Transformations: Critical Anthropological Perspectives*, Amsterdam: Harwood Academic Publishers, 2000, pp.1-33.
- Mtuzze, P. T. [2003] *The Essence of Xhosa Spirituality and the Nuisance of Cultural Imperialism (Hidden Presence in the Spirituality of the AmaXhosa of the Eastern Cape and the Impact of Christianity on Them)*, Florida Hills, RSA: Publishers & Booksellers (Pty) Ltd.
- Olupona, Jacob K. [1991] *Kingship, Religion and Rituals in a Nigerian Community*, Stockholm: Alqvist and Wiskell.
- [2004] *Beyond Primitivism: Indigenous Relig-*

- ious Traditions and Modernity*, London: Routledge.
- Sillitoe, Paul [1998] "The Development of Indigenous Knowledge: A New Applied Anthropology," *Current Anthropology*, 39(2), pp.223-252.
- [2002] "Participant Observation to Participatory Development: Making Anthropology Work," in Paul Sillitoe et al. eds., *Participating in Development: Approaches to Indigenous Knowledge (ASA Monographs 39)*, London: Routledge, pp. 1-23
- Taylor, Bron [執筆中a] *On Sacred Ground: Earth First! And Environmental Ethics*.
- [執筆中b] *Dark Green Religion: From John Muir to Scientific Pantheism*.
- Taylor, Bron ed. [1995] *Ecological Resistance Movements: the Global Emergence of Radical and Popular Environmentalism*, New York: State University of New York Press.
- Taylor, Bron et al. eds. [2004] *Encyclopedia of Religion and Nature*, New York: Continuum International.
- Warren, D. Michael et al. eds. [1995] *The Cultural Dimensions of Development: Indigenous Knowledge Systems*, London: Intermediate Technology Publications Ltd.
- Willis, Roy [1999] *Some Spirits Heal, Others Only Dance: A Journey into Human Selfhood in an African Village*, Oxford: Berg.
- Willis, Roy & Patrick Curry eds. [2004] *Astrology, Science and Culture: Pulling Down the Moon*, New York: Palgrave Macmillan.

(みやうち・ようへい / ローズ大学大学院
人類学研究科博士課程)